

インドにおいては、イギリスの植民地支配から脱しようとする独立運動が高まるときに、タゴール (Rabindranath Tagore, 一八六一―一九四一) が現れ、西洋文明を批判しながら、西洋の支配を受けている東洋に救世主が現れて、文明の神聖なメッセージをもたらすであろうと予言しました。タゴールはキリストの愛と仏陀の慈悲の精神に共鳴しつつ、東西文化を融合し得る普遍的思想に対する信念を吐露しました。タゴールは共生共栄共義主義社会の到来を待望したと見ることができます。

以上、アジアにおける理想社会実現を目指した諸思想が、共生共栄共義主義の立場から見るとき、すべて共通性を持っていることが分かります。このようにして神主義(統一思想)に基づいた共生共栄共義主義を媒介とすることによって、宗教の統一のみならず、思想の統一も可能になると見るのです。

文先生の提示された神主義(共生共栄共義主義)は、共産主義でもなく資本主義でもありません。左翼でもなく右翼でもなく、両者を和合させることのできる第三の思想であります。従って、これを頭翼思想(Head Wing Thought)ともいいます。また精神と物質は主体と対象の関係にあるために、精神文化と物質文化、すなわち東洋文化と西洋文化を調和せしめる思想でもあります。今日までの宗教は論理性、実証性に乏しかったために、東洋の精神文化は西洋の近代科学文化を指導することができず、かえってそれに圧倒されてしまいました。しかし神主義(統一思想)は、論理的・実証的に神の存在を説明し、人間と世界の理想像を具体的に明らかにしており、科学に正しい方向性を与えるものです。本人はこの思想によって、アジアに新文化世界建設のためのアジア共同体が実現され得ると信ずるものであります。

最後に、本シンポジウムにおいて、教授の皆様方の貴重な論文発表と真摯なる討論によって、アジア共同体の形成に向けて輝かしい成果が上げられますことを信じ、また願ってやみません。

セッション I

聖書から見たアジア共同体構想と宗教統一

一 序

キリスト教はほぼ二千年前にアジアから生じた宗教で、その基本的な教えは、イエス・キリストの生涯を述べた四つの福音書と、キリストの教えを広めようと努力した使徒達の働きの記述よりなる新約聖書に含まれている。またその中には書簡と呼ばれるパウロの手紙があり、最後の章は黙示ないし啓示であるヨハネの見た幻となっており、救い主の再臨が述べられている。キリスト教の他の教えは中世ヨーロッパのキリスト教徒の実践の中からもたらされた。

その後キリスト教はさまざまな分派に分かれたが、その三つの主要分派としてローマ・カソリック、東方正教会、プロテスタントがあり、聖書の解釈の違いや教義実践の違いから、後にその他の分派や支派が生じている。しかしこれら教会は、聖書の教えに戻るべく多大な努力を払ってきている。今日われわれがキリスト教について語る場合、聖書に基づいた宗教のことであり、キリスト教の教え、すなわちイエス・キリストとその弟子達の教えは、聖書に含まれていると考える。

しかしキリスト教は実際には、もともと普遍的な原理ではなく、二千年前に実際にイスラエルで起きた歴史的な出来事¹⁾のもとに生まれたものである。イエス・キリストはその教えを一度も書き残してはおらず、砂に書いた以外は全く書き留めることをしなかった。イエスの考えを永遠に書き残そうとしたものは何もなく、われわれが今日知っている新約聖書は、イエスの死後かなり後に書かれたものなのである。福音書、書簡、



Guillermo E. Veloso (ギレルモ・E・ヴェロソ)

一九三七年生まれ。アヤラ歴史博物館の画家・イラストレーター、エチオピアの中等学校教師、フィリピン、バギオ両大学の学生課長等を経て、現在、フィリピン大学助教授。専攻、英文学。

主な著書 『The Catharsis of Suffering in Dmitri』 『The Climb to the Snows of Kilimanjaro』 他。

黙示録は教会によって作られたもので、それらの多くは、全ローマ世界で教会が繁栄した以降に書かれたものであり、新約聖書が最終的に合意される形に収録されるのに六九二年A.D.までかかっているのである。キリスト教がローマ帝国中に広まったとき、何度も手紙を書いてそれらの新しく造られた教会の考え方や時には態度を正したのは、聖パウロである。それらの手紙はどれほど無駄になっているのであろうか。それはわれわれには分からない。しかし今日われわれが持っている聖書は、キリスト教徒の信仰を論理的な論議で形式化、合理化して書き記そうとした真のはじめを示している。今日われわれがキリスト教として知っているものの編纂者は、イエスではなくパウロであり、それだけこのタルサスの人間の洗練された形而上学的思弁が、ガリラヤ人の単純な道徳的認識を曖昧にし、キリスト教徒間の相違や分裂を生じさせたとされてきたのである。ここでは、キリスト教の分裂を引き起こし、同時に他の宗教との距離を遠いものにしたすべての聖書の解釈の違いの原因として、パウロを責めようとするものではない。パウロはキリスト教を広め、そしてその使命をよく果たしたのである。しかしわれわれキリスト教徒間の相違は、おもにわれわれがキリスト教の根本、基本的真理を真に失ってしまったからであろうことを指摘しなければならない。

一一 キリスト教—歴史宗教

キリスト教は歴史宗教である。それはイエス・キリストが歴史上の人物であるという事実是否定できないからである。イエスの生涯は謎めいており、形式的な自叙伝を書くには、イエスの生涯の詳細な記録や事実

は十分でないかも知れない。しかしこの方が一風変わっており、比類のない偉大な最高の英雄であることは確かである。イエスはかつて歴史に登場したいかなる人物よりもはるかに卓越した存在である。イエスが西暦三〇年から人々に与えた影響力は非常に強力なもので、プレシディオは「かつて進軍したすべての軍隊、増強されたすべての海軍、議事を行うすべての議会、統治したすべての王を一つにしても、このイエス・キリストの生涯ほど、この地上の人間の生命に影響を与えたものはなかった」と述べている。イエスの生涯は取るに足らないものであっても、その御業の重要性故に非常に大きなものとなったのである。

この方の生涯を知ることのできる唯一の記録は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書である。それらの福音者によると、イエスは馬小屋に生まれ、少年時代は大作業場で働き、そして青年になるともに巡回説教師となった。それから罪を犯していないにもかかわらず、罪人として告訴され、偽りの裁判にかけられ、当時の犯罪人に対するローマの処刑方法で、十字架にかけられたのである。死後三日目に仮の墓に遺体はなく、その後イエスは自分の母とマグダラのマリアの前に姿を現し、また後に弟子達の前にも現れた。それ以後イエスの生涯の足跡は、世界中に知れ渡ることになったのである。なぜ単なる一人の人間の生涯が、こんなにも広まったのであろうか。イエスは周りの人々に何を語り、また何を行った故に感銘を与え魅惑し、人々はイエスの生涯を述べ伝え、絶滅しない伝染病のようにこれを広めて行ったのであろうか。新約聖書を読むと、イエス・キリストの教えは何も目新しいものではないように思われる。事実イエスの説いた多くの教えは、既に彼以前の哲学者や賢人によって説かれていたのである。孔子は、「己の欲せざる所、人に施すなかれ」と説いている。イエスは隣人を愛せよと言った。そして道教はわれわれに、「徳を持って怨に報いる」ことを教えている。

しかしながらそれらの教えは、イエス・キリストにかかると目新しい教えのように変わってしまうのである。それはイエスの説教方法によるのであろうか。多くの説教者は聴衆者を魅了し、信じさせる方法を見いだす。ピリー・グラハムがそうであった。イエスの声、言い回しであらうか。理路整然としていたからであらうか。その答えを知ることはできない。イエスの教え説く能力を示した記録は何もないのである。それらがイエスの前にいる人々を感銘させた要因であったとは思われない。どんなに人の気持ちを引く説教であっても、一時的なものであり、その印象は本当に長続きするものではない。しかしイエスの言葉は何千年も生き続けているのである。

再び全新約聖書とそれ以来のキリスト教の歴史を讀んでみると、救い主イエスの真に根本的なものは彼の生涯ではなく、教えでもなく、彼の行いであると分かる。彼の御業こそが、聖書やキリスト教全体の最も重要なかつ基本的な側面なのである。イエスの御業は、言葉よりも重い響きがあったのである。

二 イエス・キリストの御業

ヨハネの福音書十三章一節は次のように書いてある。

- ① 過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父の御元へ行くべき自分の時が来たことを知り、世にいる自分のものたちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。
- ② 夕食のとき、悪魔は既にシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうとする思いを入れ

ていたが、

- ③ イエスは、父がすべてのものを自分の手にお与えになったこと、また、自分は神から出てきて、神に帰ろうとしていることを思い、

④ 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰に巻き、

⑤ それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいで拭き始められた。⁵¹

このイエス・キリストが身を屈めて弟子たちの足を洗われたという行為は、へりくだることだけでなく、何よりもイエスの愛を示している。このイエスの愛は、単に言葉だけではなく、具体的な行動として表されているのである。愛は実践なしでは何の意味も待たないのである。足を洗った行為は、イエスが人類を愛したという軌跡を明かしするものである。彼は明らかに、たとえどんな人にも自由に自らを与えることのできた方である。そしてイエスは、人々を愛したが故に自由であった。愛は利己心、高慢、憎しみ、偏見といった悪い思いから人間を自由にする。愛はそのような人間の本性を超越させるものなのである。イエスはその愛により、他の人たちにできなかったことができた。その愛故にイエスは、全人類、全時代にとって普遍的な方となり、全人類が手本としなければならない方となったのである。

福音書にはイエスの御業が多く記述されている。彼は社会で省みられないような人々の中におられた。売春婦や取税人やらい病人や強盗たちと、何のためらいもなく交流を持たれたのである。イエスは病を直し、絶望の縁に立っている人々を牧会し、教え導き、子供たちをも愛された。ペテロはイエス・キリストの御業について要約し、短い言葉で、「イエスは御業に専念された⁵²」と表している。

かつて過越の祭りの期間に、イエスはエリコの町に入り通りすぎようとしたが、イエスの人気により群衆はイエスの通る沿道に群がっていた。そこに恐らく背は低く身は貧しく取税人という職業故に、人から嫌われていた小男が、すべての者の友であると知られたイエスを一目見ようといちじくの木に登っていた。人々は、イエスがこの取税人のことを気にかけるとは恐らく思っていなかったであろうが、イエスは彼を見たとき、「ザアカイよ、急いで降りてきなさい。今日あなたの家にとまることにしているから。」と述べられたのである。イエスは彼が身体的に貧弱な人物であっても偏見を持たなかったのである。ザアカイは体格が悪く、しかも人々から税金を搾取するローマの手先であったのである。しかし彼も兄弟であり、イエスは再びわけへだてのない愛を示されたのである。

イエスが再度ガリラヤに行かなければならなかったとき、サマリヤを通過して戻ることにした。当時サマリヤ人とガリラヤ人との間には長年の確執があり、イエスはその緊張した地域を通過することは危険であることを知っておられた。それにもかかわらずイエスは五人の弟子たちともに行かれ、弟子たちが食べ物を買って町へ出かけているとき、イエスは井戸の側に座っておられたが、一人のサマリヤ人の女が水を汲みに来たので、水を飲ませて欲しいと頼んだ。彼女は驚き、貴方はユダヤ人でありながらどうしてサマリヤ人に水を飲ませてくれとおっしゃるのですかと答えた。「これは、ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである。」

これらの二つの民の古い先入観、血族的確執、過去の恨み、偏狭さは、このようにイエスによって打ち碎かれたのである。このことはイエスが「前の法を成就し、われわれは神の子であり、人類は兄弟姉妹であり、

過去の恨みと血統的確執と憎悪の終わりであり、人種的、宗教的紛争への解答である許し、すべての傷口を癒す愛」である新約を彼らに教えるために、意図的、意識的に行われたのである。そのサマリヤ人の女は売春婦であるということを知っていたにもかかわらず、イエスは彼女に語りかけたのである。敵、虐げられた者、金持ちでさえも、イエスの心の中には友人としての位置を占めるのである。

サマリヤを通過した後、イエスと五人の弟子たちはガリラヤに向かっていた。そこではイエスについて聞いていた身分の高い人が必死に走り寄ってきた。その人は死にかけている息子を持っていたからで、彼はイエスに家に来てもらい、息子の病気を癒してもらいたいと願っていたのである。「お帰りなさい。貴方の息子は助かるのだ。」とイエスは言われた。その男は、息子が助かったかどうかを知るために帰っていった。イエスの愛に例外はなく、貧しい人だけでなく富める者や罪人にまでも尽くされたのである。

さらに一人の女が、律法学者やパリサイ人によってイエスの前に連れてこられた。その女は姦淫をしていたところを捕えられたのである。姦淫はモーゼの律法によって石打ちの刑に処せられることになっていた。律法学者やパリサイ人はイエスにどうするか尋ねたが、イエスは身を屈め砂に何かを書いて、彼らの言っていることをまるで聞いていないかのようにであった。しかし彼らがイエスに問い続けるので、身を起こしてこう言った。「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい。」この言葉を聞いて、とがめた人々はすべて一人一人その場から去っていき、女一人だけになったとき、イエスは彼女を責めたものたちはどこにいるのかと女に尋ね、女は誰もいないと答えた。そしてイエス自身も貴方を責めたりはしないし、もう二度と罪を犯さないようにといわれたのである。

この事件は、律法学者やパリサイ人たちがイエスを罠にはめ、逃れることのできない立場に陥らせようとしたものである。律法学者やパリサイ人たちは、イエスがこの哀れな女に石打の刑を命じそうにないことを知っていた。もし彼が命じなかったならば、彼自身も律法を無視したという罪で有罪となり、死刑になるはずである。しかしイエスの答えはそれぞれの人の良心に訴え、彼らは自身が罪人であるということを認め、敗北して引き下がったのである。人々の心に感銘を与えたイエスの愛だけが、罪人を許すという行為ができたのである。

しかしイエスにおいて真に最も驚くべきことは、イエスが友人に裏切られ、ユダヤのローマ総督ピラトの前に連れていかれた原因となった者をも許すことのできたイエスの包容力である。

ピラトはイエスがローマの法律を犯していないことを知ったが、群衆は「十字架につけろ」と叫んだ。そこでピラトは手を洗い、ローマの支配はこの無実の男の刑の執行には関係なく、イエスの血を求めた群衆に責任があることを示したのである。イエスはその後拷問を受け、カルバリの丘まで十字架を背負っていかれ、その十字架に釘打たれ、長い時間苦痛を与える死刑が執行されたのである。イエスが十字架にかけられ苦悶している間、イエスは「父よ、彼らをお許しください。彼らは何をしているのか、分からずにいるのです」と言われた。

自らを迫害する者のために許しの祈りをする、この行為以上に寛大なことがあるか。普通、人間は迫害した敵を呪うものであるが、イエスはそうせず逆に彼らに愛を注いだのである。このことによって、イエスの愛は英雄的な愛になったのである。イエスは単なる地上の人物ではなく、超越した存在になったのである。

イエスはその偉大さにおいて、他のものよりもはるかにそびえ立ったのである。従ってキリスト教徒は、イエスを本当に神の子であると信じて疑わないのである。神は正しく、イエス・キリストのような方を遣わすこと以外に、神の人間への愛をどのように示し得たであろうか。

四 イエス・キリストの中に見る神の愛

先に述べたように、イエスはその愛によって、普通の人間ができないことができたのである。多くのキリスト教徒たちは、ヨハネの福音書第三章十六節の次の聖句をその使命の中心にしている。「神はその一人子を賜ったほどに、この世を愛してくださった。それは御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」キリスト教徒は、イエスが人類の罪の代価を払ったお方であり、イエス・キリストへの信仰のみが救いをもたらすと考えている。

この聖句の中で極めて重要なのは、神の愛である。世界はこの愛故に神の対象であることが非常に明白である。神の愛は人間を通して明白になり、神に対する信仰により神に報いるのである。イエス・キリストはその積極的な愛を全人類、敵や迫害するものへさえも注いで、その愛を示されたのである。愛することによってイエスはすべての否定的な感情から自由になり、不信は取り除かれ、恐れは全くなかった。愛があるときは死さえも恐ろしくはないのである。従って十字架の死の縁に立たされたときにおいても、イエスは敵を許したのである。イエスは死を恐れなかった。イエスの全生涯は、すべてを愛したが故に非常に満たされて

いたのである。

新約聖書は、イエスはわれわれの罪のためだけに死んだのではなく、全世界の罪のためになくなったと述べている。従ってキリスト教は、イエス・キリストを知る知らないにかかわらず、世界の人々を包括する宗教なのである。すべての人は神の愛の対象であり、イエスは神の愛を實踐し、イエス・キリストの心の中には、キリスト教徒でないものにもその場所があるのである。

イエスに従うものは、イエスが持っていた自由を同様に持たなければならない。キリスト教徒が人々を愛する場合、黒人、白人、黄色、茶色の区別なく、すべての隣人に対してその愛を實踐しなければならない。それは相手が金持ちであろうが貧しい人であろうが、醜い人であろうが器量の良い人であろうが変わりはないのである。自由であるということは、人種、肌の色、主義主張の違いによって人を差別しないことである。自由であるということは信頼することであり、あらゆる理解を超えた信仰を持つことである。自由であることは恐れないことである。初期のキリスト教徒が競技場で腹のすいたライオンの餌食に進んでなり、ローマ皇帝を驚かしたのもっともである。彼らは主をたたえる賛美歌を歌い、自由であり、死を恐れなかったのである。敵さえも愛したのである。キリスト教徒たちのこの自由により、キリスト教は全世界の隅々まで広がっていくことになったのである。

五 イエスの愛の實踐——全人類を一つにする鍵

イエスが弟子たちの足を洗ったとき、イエスは彼らに互いの足も洗い合うように命じた。「私が、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互いに足を洗いあうべきである。私があなたがたにした通りに、あなたがたもするようには、私は手本を示したのだ。よくよくあなたがたに言っておく。しもべはその主人に優るものではなく、遣わされたものは遣わしたものに優るものではない。」

それ故、すべてのキリスト教徒はイエスの愛を實踐するべきであり、他の人がその愛を自分に示すのをただ待っているということは適切ではないのである。キリスト教徒は、愛を實踐することによって、その隣人と交流する道を率先して確立しなければならないのである。イエス・キリストの手本により、彼に従うすべてのキリスト教徒は、すべてに謙遜で善意を表さなければならない。愛を表すことによって、対象は同じ愛を返し、授受作用の始まりとなるのである。

一つの世界は、全人類が授受の関係で調和するときのみ達成され得、そしてキリスト教徒がこれを率先することが望まれている。愛があるところには寛容、理解がある。そして世界は、紛争や戦争をもたらす人種偏見や不正、疑惑から解放されるのである。

この世の諸悪が取り除かれるのは、われわれキリスト教徒が、主義主張が違っても世界中の人々に進んで愛と善意を示す場合のみである。このように悪が取り除かれれば、われわれは神の導きの下で平和と調和の中で生きて行くことができるのである。

六 キリスト教の本質

一人の律法学者がかつて、すべての戒めの中で第一のものは何かとイエスに質問したが、イエスは「イスラエルよ、聞け。主なる私たちの神は、ただ一人の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なるあなたの神を愛せよ。第二はこれである。自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ。これより大事な戒めは、他にない。」と答えた。

キリスト教の本質は、人間に対する神の愛であり、人間同士を通した神に対する人間の愛である。この戒めにより、他のすべての教義、教え、実践はこのキリスト教の本質と一致するように調整されなければならない。この隣人愛はイエスの全人類に対しての無条件の愛によって示されている。イエスが行った御業は、キリスト教の根本的な真理なのである。

そこで、アジアまた世界において宗教統一の基盤を見いだすには、基本、すなわちキリスト教の本質に返る以外によい方法はないのである。キリスト教において、すべての教えと実践、伝統の基盤、すなわち各儀式、教義、教会組織、およびその他すべてのキリスト教の側面は二次的なもので、これらをキリスト教の第一の戒めと一致させなければならぬのである。それらがキリスト教の真の本質を高めるのに役立つものでなければ、その存在について何も言うことはできない。それらがその役に立たないのであれば、それは単にキリスト教の本質を曖昧にし、世界中の人々の間に混乱と紛争、分裂を招くだけであるからである。

七 結論

キリスト教は本質的には、イエス・キリストという歴史的人物を中心に形成された歴史宗教である。この宗教の本質は神の愛であり、また人間がどのように神を愛さなければならぬかということである。

イエス・キリストの生涯の記録は乏しく、通常の意味での自叙伝も、十分詳しく書くことはできない。しかしイエスが実在したことは確かである。イエスはイエスの人生、御業、人々への教えの顛末に関与した証人たちによる記述を通して、歴史上実在したのである。われわれには、イエスの生涯について書かれた四つの福音書がある。福音書は目で見た記述ではなく、この地上に生まれ、われわれとともに生き、その存在が肉体的ではなく霊的であるが、イエスを救い主と認める全キリスト教徒により、今も強く感じられている偉大な人物に対する信仰深き信者の全般的な印象である。イエスの生涯の記述は、自叙伝的な記録や証拠を意図したものでは決してなく、普遍的な真理、すなわちそれは人間に対する神の愛であるということを示すために表されたものである。われわれがこれらの福音書を信用できなければ、何を信用できようか。

イエスについて福音を広める過程において、弟子たちはその教えを形式化、系統化し、組織すなわち教会をつくって、他の人々が改宗して容易に信仰に入れるようにした。やがて紛争が起こり、続いて戦争に発展し、ヨーロッパで戦われた最も血生臭い戦争は、すべてキリスト教の名の下に行われた。イスラム教徒に対する十字軍、またキリスト教の名の下に新しい土地を征服するための遠征により、他の大陸にヨーロッパが

- (2) ポール・ハッチンソン『クリスチャン信仰の前進』世界の偉大な宗教（ニューヨーク、タイム社、一九五七年）一九六頁。
- (3) 同上。
- (4) ジョセフ・ゲア『偉大な宗教はいかに始まったか』（ニューヨーク、The New American Library of World Literature Inc.）
- (5) ヨハネによる福音書第十三章一—五節。
- (6) ポール・M・バンビューレン『福音の不朽の意味』（ニューヨーク、マクミラン社、一九六三年）
- (7) スミス、前掲二七七頁。
- (8) ルカによる福音書第十九章五節。
- (9) ヨハネによる福音書第四章九節。
- (10) フルトン・アウスラー『The Greatest Story Ever Told』（ニューヨーク、ペルマブックス、一九四九年）一五〇—一五一頁。
- (11) ヨハネによる福音書第四章五〇節。
- (12) ヨハネによる福音書第八章七節。
- (13) ルカによる福音書第二三章三四節。
- (14) ヨハネによる福音書第三章十六節。
- (15) バン・ビューレン、前掲一五二頁。

註

- (1) ヒューストン・スミス『人間の宗教』（ニューヨーク、The New American Library of World Literature Inc. 1950）二七四頁。

もたらされるようになった。これらの試みはほとんど自己中心的な目的のためであり、便宜的にキリストの名を借りて、その行為を正当化したのである。やがてヨーロッパ文明は、現在アジアに侵入して、アジア人が何世紀も守り維持してきた精神的価値を脅かし、そしてその物質主義に従って発展したのである。

これらの問題が起きても、それらは越えられないものではない。これらの問題を解決するすべては、キリスト教の基本をもう一度見つめ直すことである。その過程で、われわれの方向性はキリスト教の根本的な本質からかなりずれていたということ、併せてそれは聖書に示されたイエスの実践的な愛であるということが分かるのである。実践的な愛により、互いに調和した授受の関係をつくることができ、アジアにおける全宗教の統一、そして世界中の統一がなされるのである。

最後に、世界中のすべてのキリスト教とすべての宗教の統一に努力されている文鮮明師と統一運動は、神を中心として全人類のために授受関係を率先することにおいて、一人のガラヤ人の手本に従っているということを示すべなければならない。われわれの宗旨、人種、歴史的背景が異なろうとも、この高貴な手本に従い、神の導きの下に集い来て、一体化し、調和しなければならないのである。

- (16) ヨハネによる福音書第十三章十四、十五、十六節。
(17) マルコによる福音書第十二章二九、三〇、三一節。

セッションII

仏典から見た

アジア共同体構想と宗教統一

